

一九八〇年代の文学とマンガ(前)

館野日出男

一、閉塞の時代と他者喪失

一九八〇年代を端的に言い表す言葉をひとつ選ぶとするならば、やはり「バブルの時代」というのが最も適切だろう。しかし、「バブルの時代」は正確には一九八〇年代の後半のできごとである。「バブル」が始まったのは、一九八五年のプラザ合意の後、日銀が、公定歩合を四度にわたって引き下げ、その結果、金余り現象が生じ、人々がその余った金で土地や株を買い漁るといった現象が生じてからのことである。

「バブルの時代」にいたる一九八〇年前半の出来事を思い起こしてみると、この時期は一九八〇年に大平首相が急逝し、その後に鈴木内閣が生まれ、鈴木首相は「増税なき財政再建」を公約としたが、さしたる成果もなく中曽根内閣にバトンタッチせざるをえなくなった。中曽根首相は自らの内閣を三次にわたって組閣し、「戦後政治の総決算」をスローガンに、行財政改革を推進し電々公社、専売公社、国鉄などの民営化をおこなった。日本の自動車生産台数がアメリカを抜き世界第一位になったのもこの頃である。日本に貿易黒字をもたらした産業は自動車に限らず、電気機械、ハイテク製品等であった。その結果としてアメリカと貿易摩擦が生じ、

自動車メーカーはアメリカに現地生産工場を建設せざるを得ない事態にたち到った。中曽根首相がテレビをとおして国民に「一人あたたま百ドルでいいから外国のものを買いましょう」と呼びかけた。一九八〇年代前半は、一九七三年、一九七八年と二度にわたるオイルショックがあったにもかかわらず、その困難を跳ね除け、「高度成長」に引き続いて経済成長を維持しえた時期であった。

この時期はまた消費の面から言うならば、「大量消費」の時代の始まりであった。あらゆるものが市場にあふれ「一億総中流」と化した人々は必死になって物を買ひ漁り、消費の中に自己満足を見出そうとした。

中曽根首相が「外国製品を買いましょう」と国民に旗を振ったのは、わき目も振らず一心不乱に経済活動にいそしんできた戦後の日本人に、その付けが廻ってきたことを立場上どうしてもいわざるをえなかったからである。「日本も外国（アメリカ）のことを考えなければやっていけません」という忠告である。確かに、バブル期、日本には外国のブランド商品が回り、人々は競ってそれを買ひまくった。しかし、だからといって日本が外部（外国）を意識していたかというところではない。むしろ実情は極端な内閉状態にあったというべきである。

一九八八年に発表された村上春樹の『ダンス・ダンス・ダンス』には、バブル経済の実質が他者喪失にあったことを実に巧みに描写している箇所がある。他者喪失というのは、ここではすなわち外部喪失のことであると考えてよい。

この小説の主人公は札幌に赴き、かつて宿泊した小ホテル、「いるかホテル」に宿泊しようとするが、そのホテルがなんと「ドルフィン・ホテル」という巨大ホテルに様変わりしている。そこで主人公は「いるかホテル」に関する調査を開始しようと、札幌で一番大きな図書館に行き、過去の週刊誌の記事を調べる。そこで明らかになったことを作者は次のように記す。

要約するとこういうことだった。まずだいいちに札幌市の一部で大規模な土地の買い占めが進行していた。二年ばかりの間に水面下で土地の名義が異様に動いた。地価が意味もなくホットになってきた。記者がその情報を得て調査を始めた。調べてみると、土地はさまざまな会社によって買われていたが、その大方は名前だけのペーパー・カンパニーだった。会社の登録はしてある。税金も払っている。しかしオフイスもないし、社員もない。そしてそのペーパー・カンパニーはべつのペーパー・カンパニーに繋がっていた。実に巧妙に名義上の土地転がしが行われていた。二千万で売られた土地が六千万で転売され、それが二億で売られていた。様々なペーパー・カンパニーの迷路をひとつひとつ辛抱強く辿っていくと、行く先はひとつだった。B産業という不動産を扱う会社だった。これはリアルな会社だった。赤坂に大きなファッショナブルな本社ビルを持っている。そのB産業はおおつびらにはないがA総業というコングロマリットに繋がっていた。鉄道やらホテル・チェーンやらデパートやら雑誌、クレジット金融から損害保険までを配下に収める巨大企業だった。⁽¹⁾

ものの価格というのは売り手と買い手との相互の関係の中で決まっていく。現時点で二千万の土地を六千万で売りたいと思っても、六千万で買っても良いと判断する買い手がいなければ六千万という価格は成立しない。しかし、買い手の意向を無視して売り手が自らの所有する土地を六千万で売り出すことは自由である。同族会社内のペーパー・カンパニーに六千万で買い取らせることは売り手が勝手に六千万という売値を設定することと同義である。買い手という他者がいなければ何をやっても自由であるが、この価格はまったく無意味である。買い手という他者がいなければそもそも価格ということの意味が成立しないからである。⁽²⁾

一九八〇年代日本の企業も銀行も、いつか買い手が現れるであろうという予測のもとに土地を買い漁ったの

である。実際の買い手という他者を欠いた行為を行っていたというべきである。他者を欠いた企業の唯我独尊時代がバブル時代の実相であった。

二、内閉世界としての「クリスタル」

田中康夫の『なんとなく、クリスタル』が発表されたのは一九八一年である。時代の申し子といってもよいこの作品は、当時のベスト・セラーとなつて「クリスタル族」という流行語を生んだが、きたるべきバブル期の他者を喪失した日本人の姿を巧妙に描いた作品として理解することができる。

小説の主人公「由利」は都内の私大に通う女子大生である。本人は中流家庭の出身でお金には不自由しないといっているが、モデルの仕事でさらに稼いでいる。「由利」にはやはり学生であるがキーボード奏者として稼いでいるボーイフレンドの「淳一」がいて、都内のマンションで「共棲」している。「共棲」とは所謂「同棲」のことであるが、由利は「同棲」という言葉を使いたがらない。由利は自らの生活を次のように語る。

淳一と私には、おたがいに仕事があった。経済的に、だから、自立している状態だった。だから、私たちは一人前の社会人であるともいえた。

とはいっても、同時に、学生という、社会に出る前の身分も持ち合わせていた。

モデルの仕事は楽しいものだった。学校では知り合えない、多くの友だちがそこにはいた。

そして、学校へ行けば、行ったで、多くの愉快な連中がいた。

でも、それだけ多くの友達がいても、一人になると急に、アイデンティティーを、いったいどこに置い

たらしいのか、わからなくなることがあった。

そうした時に、そばにいて離れていけないものが欲しかった。心を許しあえるものが欲しかった。私たちにとっては、それがおたがいに対して望んでいることだった。

私のアイデンティティーは、それをモデル・クラブに求めることも、大学やテニス同好会に求めることも、求めようとおもえば、できないことではなかった。淳一にしても、グループやスタジオ、大学に求めることができた。

でも、私たちのおたがいの存在の方が、より大きなアイデンティティーとすることができた。

同棲どうせいという言葉が、私はきらいだった。そこには、都会の片隅で二人が肌すりよせながら暮らしている、というイメージがあった。

おたがいに、別々の世界を持ちながらも、一緒に住んでいる私たちには、共棲どうせいという言葉の方が似合っていた。

由利と淳一の関係の希薄さは、由利が自己と淳一との関係を、学校や職場や趣味の会での人間関係と大差なく捉えているところに現れている。もちろん由利は、淳一との関係はその他の人間との関係と区別しているのであるが、その区別に本質的な質の違いというものがない。もし由利が淳一との結婚を考えたならば、ほかの仲間達に対するのとは違った見方が出てくるはずである。

女が結婚対象としての男を選ぶとき、その男が配偶者として果たして適当なのかどうかというある意味で切羽詰った選択に迫られる。この男を配偶者として、これからの何十年かをいっしょに生きていこうとすると、この男は、それに見合うだけの責任と能力を十分に持っているかどうかを女は察知しようとする。こうい

うとき女は真剣にその男を見る。その男が彼女にとって他者として現れるのはこういうときである。もちろん男が女を真剣に結婚対象として考えたときも同様である。

由利と淳一の二人の関係から、二人が後に結婚し子供を生むというような関係は予想し難い。由利の淳一を見る見方の中に夫として果たしてどうなのかといった視点がまったくないのである。由利はこの小説の最後の箇所で自分の十年後の将来について思い巡らすところがある。「これから十年たった時にも、私は淳一といっしよでありたかつた⁽⁴⁾」というが、もちろんそれは今の状態を維持していくという条件で考えられている。十年後の生活形態、果たして自分がどういふ職業についているのか、結婚しているのか、あるいは子供を持つのかという具体的なことは一切触れられていない。語られているのは、このまま、「なんとなく」快適な生活が続けられればよいということだけである。この小説の最終の箇所で、この小説にとって極め付きの一節が現れることとなる。へ三十代になった時、シャネルのスーツが似合う雰囲気を持った女性になりたい⁽⁵⁾という由利の感慨でこの小説は締めくくられている。

由利にとって最も重要なことは、淳一とどういふ生活をしているかということより「シャネル」が着られるかどうかということである。生活の実質に関する思いよりも、「シャネル」というブランド名が最初に頭で浮かんできてしまう。由利の判断基準はすべてにおいて実質よりも名目におかれている。

野菜や肉を買うなら、青山の紀ノ国屋がいいし、魚だったら広尾の明治屋か、少し遠くても築地まで行ってしまふ。パンなら、散歩がてらに代官山のシエ・リュイまで買いに行く。

ケーキは、六本木のルコントか、銀座のエルドールで買ってみる。学校の子達と一緒なら、六本木のエストや乃木坂にできたカプッチョの、大きなアメリカン・タイプのケーキを食べに行くのがいい。淳一と

一緒の時は、少し、上品に高樹町のルポゼで、パイにトライしてみる。

夜中にケーキを食べに出かけるなら、青山の三丁目のキャンティで、白ワインと一緒に食べるのがいいだろう。キラ―通り沿いにあるサンフランシスコ・フレーザーバーのお店、スエセンズで大きなアイスクリームを食べてから、おなかをこわさないかなと心配しながら帰るのもいい。⁽⁶⁾

由利の生活のあらゆるものがブランド商品に囲まれている。由利はこのブランド商品に囲まれた快適な生活環境を「クリスタル」と呼ぶ。由利は淳一が留守の間に知り合った青年と浮気をするがその彼と次のような会話をする。

正隆（由利の浮気相手の学生＝筆者注）は、しばらく黙っていた。

そして、

「生活感覚が似ているのかな、君たちと」

と言った。

「クリスタルなのよ。きつと生活が。なにも悩みなんて、ありやしないし……」

「クリスタルか……。ねえ、今思ったんだけどさ、僕らって、青春とは何か！恋愛とは何か！なんて、哲学少年みたいに考えたことってないじゃない？ 本もあんまし読んでないし、バカみたいになって一つのことを熱中することもないと思わない？」

でも、頭の中は空っぽでもないし、曇ってもないよね。醒め切っているわけでもないし、湿った感じじゃもちろんないし、それに、人の意見をそのまま鵜呑みにするほど、単純でもないしさ」

そう言つて、タバコの火を消した。⁽⁷⁾

由利はあらゆるものから適切に距離をとろうとしている。そのことのみが「クリスタル」な生活を可能にすると考えている。由利は、恋人の淳一と「共棲」しているのも、べとついたもたれあいの関係である。「同棲」がいやだからである。「同棲」は由利にとつて男との適切な距離を見失わせる危険がある。

しかし、由利の生活を、人との関係、モノとの関係から見ると、由利が誇らしげに語るのとは逆にある。貧しさに刻印されているのがわかる。由利と淳一との関係は、決して信頼関係にもとづいた安定した関係にあるとはいえない。二人とも結婚を考えていないせいか、両者ともにこっそりと浮気をしているくらいである。適切な距離をとるという関係は、言い換えれば、いつ壊れるかわからない関係でもある。

モノとの関係においても、人との関係と同様、その関係は希薄なものである。由利の意識にあるのはブランドの名前であつて、決してモノそのものではない。人であれモノであれ由利は対象との必要な関係を得ることができない。対象との必要な関係は、由利にとっては「クリスタル」ではないのである。由利の生きる生活環境をみると、由利は人間が生きていく過程において本来的に必要なとされる関係というものを欠落させている。人は、モノであれ人であれ、対象と関係することによって自己がつくられていくという体験をするものである。またそのことによって自己が生きていることの実感を得るものである。由利の問題は、由利が生の実感を得る手段としての他者との必要な関係をきれいに払拭してしまっているところにある。これはまさに他者を欠いた自閉症の症状であるといつてよい。

もちろん作者は、自ら描いたこの「クリスタル」な生活が問題であることに気がついている。作者は丁寧な小説に現れてくるブランド名のひとつひとつにコメントをつけることによって、自らの描いた世界を相対化し

ている。たとえば先に引用した六本木のケーキ屋ルコントに対しては「フランス人、A・ルコント氏の経営するケーキ屋。南青山一丁目新青山ビルにも出店があります。このところ、サービスと味が急激に落ちてますから、あんまり、規模を大きくならぬよう……」⁽⁸⁾という具合である。作者は、この小説全体で四百四十二のコメントを付している。このコメントにこめられた作者の批評精神を評価しなければこの作品はほとんど意味を持たないが、この作品がミリオン・セラ―となったのは、由利のような生活に憧れた読者が相当数いたということである。由利の生活をそのまま無批判に受け入れた読者も由利と同様の病に侵されていたというべきである。

三、田中康夫の批評精神

作者田中康夫の批評精神が最大限に發揮されているところは、何ととっても、作品の最後に付されている人口と年金に関する資料である。

◎人口問題審議会「出生力動向に関する特別委員会報告」

- ①出生率の低下は、今後もしばらく続くが、八十年代は上昇基調に転ずる可能性もある。
- ②しかし出生率が上昇しても、人口を現状維持するまでには回復せず、将来人口の漸減化傾向は免れない。

合計特称出生率＝一人の女子が出産年齢（十五―四十九歳）の間に何人の子供を生むかという率

一九七五年 一・九一人

一九七九年 一・七七人

(合計特称出生率が、仮に二・一人で推移した場合、二〇二五年人口の増減がストップする。静止人口の状態になるといわれている)

◎ 「五十四年度厚生行政年次報告書(五十五年版厚生白書)」

六十五歳以上の老年人口比率

一九七九年 八・九%

一九九〇年 一一%(予想)

二〇〇〇年 一四・三%(予想)

(国連が定義した、「高齢化社会」とは老年人口比率が七%以上の場合を指す。)

厚生年金の保険料

一九七九年 月収の一〇・六%

二〇〇〇年 月収の二〇%程度(予想)

二〇二〇年 月収の三五%程度(予想)⁹⁾

作者が小説の内容と直接的には関係のないこのような統計資料を付したことの意図は明らかである。作者、田中康夫は、このような「クリスタル」な国民生活が継続するならば、著しい「少子高齢化」とそれにもな

う年金制度の崩壊を招くことを予想していたにちがいない。この作品が、一九八〇年に、まだ学生であった一人の青年によって書かれたことを考えるなら、この批評の先見性は特筆すべきものである。

由利の一番の希望は子供をもつことではない。それよりは仕事をしてブランドものの服を着たいといっている。そのことは、ブランド商品を買えるだけの経済力は保っていきたいということである。ここでは子供も仕事も持ちたいが、果たしてそれが可能であろうかといった、育児と仕事をめぐる悩みといったものは一切語られていない。小説の中で「クリスタル」に生きようとする由利にとっては、育児などという問題は語るに落ちるというわけである。しかし、語られていないが由利の頭の中で漠然とある十年後の生き方を辿ってみると次のようになる。十年後もできたら淳一と一緒に暮らしていきたい。結婚するかどうかはわからない。もし淳一と結婚しても子供はつくりたくない。なぜなら、育児と「シャネルを着たい」という自己実現と矛盾するからである。これは由利と当時同世代であった日本の女性たちの全体ではないが何パーセントかの考えを代弁していると考えられる。一九八〇年代初頭に二十歳前後であった女性たちと、その後にくつ女性たちの出生率の変化を見れば、田中康夫が描いた女性像がこの時期のひとつの一例であることは間違いない。その意味では作者の予測は見事に当たったわけである。

この作品が発表されたとき、江藤淳を除く多くの批評家は、消費に溺れる軽薄な女子大生を描いた「軽薄文学」というレッテルを貼ったが、この時代すでに始まっていた日本の傾向を実に正確に見通していたというべきである。日本の高度成長とそれにつづく時代は一見繁栄を謳歌しているように見えたが、その実、今問題とされる日本の社会構造の変化というものを実に適格に読みとっていたのである。その傾向とは、一つの閉塞状況への移行ということである。この閉塞状況は小泉政権を経た今の日本においても尚、続いているといえるべきである。

四、あだち充『タッチ』

一 他者としての和也

あだち充の『タッチ』が『週間少年サンデー』に連載されたのは一九八一年から一九八六年にかけてである。田中康夫は、日本が内閉の度合いを強めるなか、他者とかかわりを持たなくなつた若者たちの姿を描いたが、田中康夫の小説に描かれた世界と対蹠的世界を描いたのがあだち充であった。田中康夫が進行する時代の現象を描き、それにコメントを付す形で時代を批評したのに対し、あだち充は高度資本主義の中で見失われようとする人間の生を真つ向から描き、それが結果的に他者を喪失した時代の批評となつた。

『タッチ』の主人公は若い高校生の男女、上杉達也とその幼なじみ浅倉南の二人である。この二人の関係を、『なんとなく、クリスタル』の由利と淳一の関係と比較してみると、その関係性があまりに違うことに気づかされる。

由利と淳一の関係は、今は一緒に「共棲」しているが、場合によって別れることの可能性の否定できないものである。あらゆる異性関係が別れることの可能性を含むものではあるが、達也と南の関係は、もし二人が別れるとすると、二人のそれまでの人生全体が同時に意味を持たなくなるほどの重いものを持っている。達也と南の関係は、両者ともに物心つき始める頃からずっと意識してきた関係であり、もしどちらかがその関係を清算しようとする、関係を絶たれたほうは、過去のすべてが否定されるということになり、どちらが否定されても実存の危機（＝死）が待ち受けるということになる。事実、達也の弟、和也は交通事故死しているが、南への愛を否定されたことからくる自死の影がどうしてもつきまといてしまう。和也は、南が本当のところは自

分ではなく兄の達也を愛していることに気づいていたからである。

達也と弟の和也はあらゆる面において対照的である。和也は努力家で、勉強とスポーツにおいて抜群の能力をみせるのに対し達也は何をやってもいい加減で弟とは比較の対象にならないほど結果を残すことができない。達也と和也と南は幼い頃からお互いの家族がお隣同士でいわば幼少時から知り合いであるが、可愛らしく聡明な南をめぐって二人の兄弟が彼女の愛を獲得しようとひそかにしのぎを削っているという関係がある。和也がすべてにおいて兄を凌駕し、自己の絶対的な力を見せつけようとする意志の背後に南は男の権力意志のようなものを感じ取ってしまう。南が惹かれたのは、自分の対等なパートナーとしてつきあうことのできる兄達也のほうであった。この双子の兄弟と一人の女の子をめぐる三角関係の心理学を山崎哲はこう分析する。

恋愛とは、互いの相手の内部に入っていく、相手の自己を解体することである。その自己解体を快として引き受けることである。けど、カッチちゃんはあまりにも完璧で、入っていく余地がない。

カッチちゃんは隙間だらけ。どころか、弟に南を譲ろうとする気配すらある。

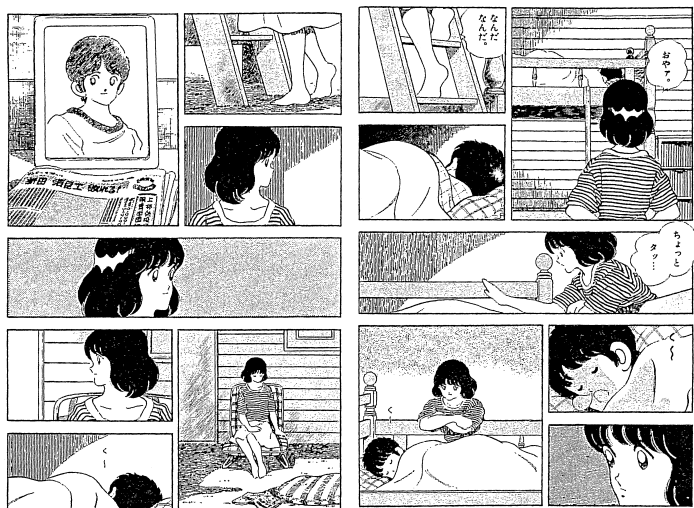
ということとは、あらかじめ自己解体を引き受ける資格があるということ。南の気持ちがカッチちゃんに傾くのも無理がないのである。

カッチちゃんも南の気持ちが兄に傾いていることを知っている。そのため高等部に進むと、ひたすら野球に打ち込む。「甲子園にいきたい」という南の幼いころからの夢を叶えてやることでライバルの兄を一步リードしようとするのだ。⁽¹⁰⁾

南が、「自己解体」を引き受けることのできない独我論者の和也ではなく、他者を認める柔軟性を持った達

也に惹かれていくところに作者の批評精神があるが、あだち充のこの批評はこの時代にあつてはまさに時代批評になつていくべきである。

作者はこの独我論者の和也を突然交通事故で死なせてしまう。和也の死後、達也は弟の後を引き継ぎ、野球



図例 I

あだち充『タッチ』，小学館文庫 14巻 p. 52 以下

を始める。もともと素質のあつた達也は忽ち頭角を現す。達也の活躍で達也のチームは甲子園に出場を果たし最後には夏の甲子園で優勝を成し遂げる。一方南のほうは新体操部に入り、こちらも頭角を現し、夏のインターハイで個人総合優勝を果たす。

達也が県の大会で優勝を果たし甲子園への出場を決めた日の翌朝、南が達也に会いに来る場面がある。昔から上杉家と浅倉家は同じ家族同士という間柄であるので、南は達也の部屋につかつかと入り込んでくる。ここに、失われた共同体を復活させようとするあだちの意志を讀みとることができる。(以下図例 I 参照)

南は達也がもうおきているものと思つて部屋にいくと達也はまだ寝息をたてて寝ているところである。南は達也を見入る。達也の顔はここではまさに幼子のような顔に描かれている。他方、達也の顔を見入る南の顔に母性の優しさが充溢している。南の愛が母性に満ちた瞬間

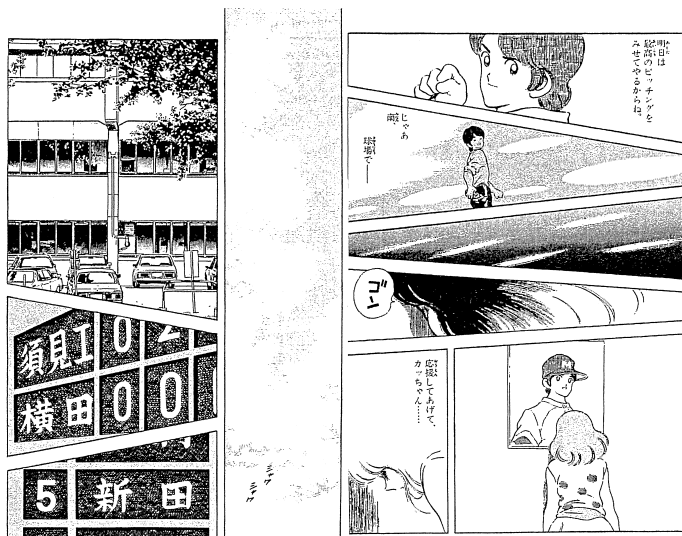
を、作者は、寝入る幼子を見つめる母親のイメージで捉えているのである。しばらく達也の寝顔を見つめていた南は、ふと昨日の試合を伝える新聞が亡き弟の和也の写真の前に置かれているのを目にする。ここでたちどころに南は、達也もまた一時も和也のことを忘れずに練習に打ち込んだことを理解するのである。南はその後でソファーに腰かけ、居住まいを直し、目を伏せるコマがある。この一連のコマの続きに言葉は何も語られていないが、ここで南は自分と同様達也もまた亡き和也への想いを胸に試合を続けてきたことを理解するのである。

死者和也は、達也にとつても南にとつても常に自己と対峙し、自己を見つめる契機を与えてくれる絶対的な他者として現れる。『タッチ』の作者は死者という絶対的な他者を導き入れているが、死者という他者は一九八〇年代以降日本においてまったく忘却された存在となる。その好例が『なんとなく、クリスタル』である。

二 死者の視点から見られた風景

達也にとつても南にとつても亡き和也が絶対的な他者として出現するということは、達也や南の生に、死んだ和也が陰に陽に影響を与えているということでもある。達也にとつて和也は実際、自分が野球の選手としてだけでなく和也に近づけるかという一つの規範として働いている。達也を愛する南にとつても、達也が甲子園出場を決められるかどうかという瀬戸際のときに、亡き和也が生前南に見せたタフな精神に救いを求めずにいられないのである。(図例Ⅱ参照)

南の脳裏に亡くなる前の和也の姿が浮かぶ。和也は自信に満ちた態度で最高のピッチングを南に約束する。和也はその後、後ろ向きに歩みながら時々振り返りつつ遠ざかっていく。その後の三コマ目は、光が空間をよぎっていく様な抽象的な絵柄になる。この抽象的な世界とは死の世界である。和也が消え去ったのはこの世界



図例Ⅱ

あだち充『タッチ』，小学館文庫 11巻 p. 156 以下

である。和也の後ろ向きに遠ざかる姿はまるで南を死の世界に誘うかのようなものである。五コマ目の後ろ向きの姿の南は死の世界への想いに現実世界を忘れてしまったかのようにもある。六コマ目の淡い線で描かれた南の下向きの横顔は彼岸と此岸のあいだでかろうじて肉体を保っている精神そのものように見える。

次のページの冒頭のコマは、縦長で茫洋とした夏空でどこかでセミの鳴き声が聞こえてくる風景である。

その次のコマは、もう少しコマが小さくなって球場の外形を映し出す。次に画面はますますクローズ・アップされて球場のスコアボードが映し出される。前のページで、南の想いに従って読者の視野が現実から茫漠とした彼岸へ広がるのに対して、この場面では逆に彼岸から此岸へ戻ってくるのである。

ここであだち充の風景描写の特徴に触れておく必要がある。あだち充の作品のなかには常に彼岸へと向ける視線が入り込んでいて、作者の描く風景がいつも彼岸から見つめられているという印象を読者に与えるということがある。この彼岸から見られた風景画によって、あだち充の作品世界は圧倒的な深みと叙情性を獲得する。彼岸への視線とは、限定された時間の中でしか人間の生が展開されないという意識のもとでのみ獲得可能

である。人間の生が儂いはかなからこそ生が輝くのだという認識があだち充の作品に深みと叙情性を与えているのである。

作品の中にリアルな（劇画風といってもよいが）風景画を挿入するのは、一九八〇年代初頭から現在の矢沢あいまで続く傾向である。しかし、一九八〇年代のマンガを代表する作品として例えば弘兼憲史の『課長 鳥耕作』を例にとつて、あだち充の風景描写と比較してみるとまったくその印象が違うことに気づかされる。『課長 鳥耕作』の世界にまったく現実世界を彼岸から見るという視点がないため、現実世界はあくまで現実世界としてしか映らず、その風景は世界の平板さしか写し取らない。日本のバブル時代をどちらが忠実に写しているかといえば、バブルの狂騒を描いた『課長 鳥耕作』のほうに軍配が上がるといえるのであるが、どちらが人間を深い次元から描いたかといえば、問題なく彼岸からの視線を常に画面に導入させることに成功したあだち充に軍配が上がる。

達也と南が死者和也への想いを忘れないということは、二人も自分たちもいつかは死ぬのだというあたりまえの認識を持っているということである。このあたりまえの認識を喪失したのが日本のバブル期であるが、その透徹した認識は『なんとなく、クリスタル』にも『課長 鳥耕作』にも見られない。

生と死は表裏一体で、いかに生きるかを考えるとき自分が死を待つ存在であるという認識を忘れては、そもそもこの省察は意味を持たない。『なんとなく、クリスタル』の由利が自らの生を「なんとなく」としか生きられないのは、死すべき存在としての自己をまったく忘却していることによるし、鳥耕作が色と欲の世界から脱却できないのもこの認識を忘却しているからである。

達也も南も死を認識しているからこそ無意識に生を謳歌しようという本能に導かれている。無意識に生の短さ、青春の短さを感じ、それを生ききろうとするのである。二人がお互いをしかと見定めてつきあうことがで

きるのも、死を前提としての判断がそこにあると考えられる。達也の南を見る視線のなかにエロスが滾たぎっているのも、死の意識を前提にしていればこそである。(図例Ⅲ参照)



図例Ⅲ

あだち充『タッチ』、
小学館文庫 8巻 p.37 以下

達也は体育館で新体操の練習をしている南の姿をこっそりとみつめている。達也の視線は南の下腹部、腰、尻に集中する。達也の視線は性的な対象としての南を見るにとどまらず、将来の自分の子の母としての南にまで及んでいる。この達也のエロスの中に明らかにタナトスが入り込んでいる。こういう次元で異性にであうとき、男は女に対し、女は男に対し間違いなく他者として出現する。

一方、『なんとなく、クリスタル』の由利が淳一に対する感じ方には、エロスは存在しても、決してタナトスが含まれることはない。

以前は、淳一とのセックスも他の男の子とのセックスも、おなじひとつのゲームだと考えていた。相手に「抱かれている」だけではない、女の私だって男の子を「抱いている」んだという、気負いがあった。セックスなんて、おたがいが楽しめればそれでいいんだという気持ちもあった。へ幾ら、男の子がええらそうなことを言っても、女の子が許すから抱けるんじゃないか〜とも思っていた。

でも、あの眼がくらみそうになる高圧電流の感じを知りようになってから、私は違ってきた。

淳一以外の男の子と結ばれても、決してあの感じは襲ってこなかった。淳一というなにかもおたがい

に知りつくしている、精神的にしつかりと結ばれた男の子とでなくては、あの感じが訪れないのだった。⁽¹⁾
 由利と淳一との特別な関係性は、「なにもかもおたがいに知りつくしている」という信頼性から生まれてい
 る。信頼性は確かに感情だけの問題ではないが、この感情の中に自己の生の限界を見究める洞察はない。由利
 と淳一の関係と達也と南の関係を比較するとき、前者の関係の底の浅さに気づかされるのである。両者の関係
 の分かれ目は、どれだけ他者を認識できるか、死者をも他者として認識できるかということにかかっている。

(本論考は、二〇〇五年度の特別研究助成による成果の一部である。)

注

- (1) 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス 上』一九八八年、講談社、一〇二頁、一三行以下
- (2) 柄谷行人『探求Ⅰ』一九八六年、講談社、四四頁、一八行以下参照、柄谷はこの著作において、言語コミュニケーションと価格の成立に不可欠なものとして他者の存在を挙げている。柄谷はバブル現象が徐々に見え始めてきた一九八六年の時点ですでにバブル現象とは実は他者を欠いた病であることを洞察していた。
- (3) 田中康夫『なんとなく、クリスタル』一九八五年、新潮社(文庫)、一六六頁以下
- (4) 同書、二二二頁
- (5) 同書、同頁
- (6) 同書、四〇頁以下
- (7) 同書、一二四頁
- (8) 同書、四三頁
- (9) 同書、二二四頁以下
- (10) 山崎哲『タッチ』、『名作マンガ講義』(二〇〇五年、株式会社情報センター出版局) 所収、二〇頁以下
- (11) 田中康夫『なんとなく、クリスタル』、二〇四頁